【新三年生用】 古文単語330三訂版 Ｐ１２０～Ｐ１３１

［Ａ］次の文の（訳）の〔　　〕に入る語句として最も適当なものを選び、番号で答えよ。

１ いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ。（徒然草）
（訳）どこにでもあれ、しばらくよそに泊まるのは、目の覚める（新鮮な）〔　　〕がする。
①予感　②音　③香り　④気持ち　　１〔　　〕

２ 雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。（平家物語）
（訳）雨が降るように（矢を）射たが、鎧がよいので裏まで貫かず、（鎧の）すき間を射ないので〔　　〕ない。
①傷も負わ　②殺せ　③役に立た　④届か　　２〔　　〕

３ まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。（徒然草）
（訳）本当によそ（の獅子・狛犬）と違っているなあ。都への〔　　〕（話）として語ろう。
①笑い　②みやげ　③うわさ　④思い出　　３〔　　〕

４ 我を知らずして、外を知るといふ理あるべからず。（徒然草）
（訳）自分を知らないで、他人を知るという〔　　〕があるはずがない。
①前例　②道理　③理想　④論理　　４〔　　〕

５ 便りごとに物も絶えず得させたり。（土佐日記）
（訳）〔　　〕（がある）ごとに贈り物も絶えずやった。
①行事　②機会　③手紙　④連絡　　５〔　　〕

６ 小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出で来にけり。（十訓抄）
（訳）小式部は、これ以来、歌詠みの世界で〔　　〕が高くなった。
①評判　②気位　③地位　④悪名　　６〔　　〕

７ うち笑ふことがちにて暮れぬ。つとめて、客人帰りぬる後、心のどかなり。（蜻蛉日記）
（訳）笑いがちに一日を過ごした。〔　　〕、客が帰ってしまった後は、のんびりした気持ちだ。
①昼過ぎ　②翌朝　③翌日　④夕方　　７〔　　〕

８ 十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に、門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。（土佐日記）
（訳）陰暦十二月二十一日の午後八時ごろに、出発する。その〔　　〕を、少しばかり紙に書きつける。
①事情　②感慨　③記録　④情景　　８〔　　〕

［Ｂ］次の文の（訳）の〔　　〕に入る語句を答えよ。

９ 才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ。（源氏物語）
（訳）〔　　〕を基本としてこそ、実務能力が世間に重んじられるということも確実になるのでございましょう。　９〔　　〕

１０ 世の例にもなりぬべき御もてなしなり。（源氏物語）
（訳）後世の〔　　〕になってしまうにちがいないご待遇である。　１０〔　　〕

１１ 寺にたうときわざすなる、見せたてまつらむ。（大和物語）
（訳）寺で尊い〔　　〕をするということだ、お見せ申し上げよう。　１１〔　　〕

１２ うつつの人の乗りたるとなむ、さらに見えぬ。なほ下りて見よ。（枕草子）
（訳）（卯の花をびっしりと挿したあの牛車には）〔　　〕の人が乗っているとは、まったく思われない。やはり（車から）降りて（自分で）見てごらん。　１２〔　　〕

解答

【新三年生用】古文単語330三訂版 P120～P131

1 〔④〕
2 〔①〕
3 〔②〕
4 〔②〕
5 〔②〕
6 〔①〕
7 〔②〕
8 〔①〕
9 〔学問〕
10 〔語り草〕
11 〔仏事〕
12 〔正気〕